

## 黙っていることは罪だ

高山等



この広島は夏、晴れわたった空。平和で、静かな空がおおっている。家庭も、職場も。盛り場も、いつものように何ごともなく過ぎていき、そのまま、いつまでも続けていくかのようである。

しかし、私には、この平和な今日の広島に重なって、途方もなく恐ろしい光景が見えてくる。25年前の夏の日、地獄の光景。その日も今日と同じく、美しい、晴れた夏の朝だった。しかし、一瞬の間に、その日は呪いの日に変わった。1945年8月6日、広島。

そのとき、私は中学の二年生であった。私たちは学徒動員で、トラック工場に徴用されていた。その朝は、原爆の爆心地から2キロほど離れている修理工場の2階で働かされていた。日が高くなり、暑くなってきた。学生たちは、おしゃべりをしながら働いていた。突然のきらめき。目もくらむ閃光。ものすごい熱気。痛む眼を押さえ、あわてふためきながら、私が逃げ場を求めているときに、爆弾の爆発する巨大なとどろきが耳を打った。それからどうなったか、私は覚えていない。すべてが混乱し、すべてがその瞬間にまったく変わってしまった。

無意識のうちに、私は工場の近くにあったトラックの下に逃げ込んだ。私は恐怖にふるえて、そこに倒れこんだ。どのくらいの間、そこにじっとしていたのか、私には分からない。ずいぶん長く、そうしていたと思う。まわりはまっくらやみで、そのやみの中から、建物がくずれる音、人々のうめき声が聞こえてきた。

やがて、私の眼に、人々が逃げていく姿が見えた。私も逃げなければと、トラックの下からはい出した。ぞっとする、恐ろしい光景がそこにはあった。建物もなにも、すべてが破壊され、どこでもここでも、人がたおれ、傷つきうごめいていた。皮ふが焼け、破れ、血が流れていた。多勢の人々が、倒れた家の下敷きになっていた。爆発で焼かれて、黒こげになっていた。

このとき、20万人の人が殺され、数限りない人々が傷つき、なすすべもなく放置された。人々の姿は、人というよりは、もう幽霊かお化けといったほうがよかった。生きのびたものも、家族をみつけることはできなかった。死体もちろん確認できなかった。

ほんのさっきまで、秩序正しく働いていたのに、いまは、まったくの混乱と叫喚の世界に変わっていた。今も、何万という遺体がまだみつからない。だれが、どこで、どのようにして死んでいったか、分からない。

あれから 25 年たった今日まで、原爆の後遺症で、年々、人が亡くなっていく。広島と長崎の悲劇を 2 度とくりかえしてはならない、これが私の願いであり、祈りである。私だけでなく、多くの人があるように祈り、訴えてきているのだ。原爆にあつて、生き残ったものも、日々、絶えず、生命の危険を覚え、恐れながら生きている。ガンの症状を呈したり、白血病になったり、悪性腫瘍のために、突然倒れ、亡くなっていく例が多い。そうでなくとも、人々の慢性の病気は直接的にせよ間接的にせよ、原爆と関係していることがある。原爆にあつた両親から生まれた 7 歳の少年が、白血病で死んだのを、私は最近も聞いた。「僕はもっと生きたいよお」と、この少年は母親に言いながら死んでいった。この少年の叫びは、私たちみんなの叫びであり、祈りなのだ。昨年 6 月 14 日に、17 歳になる女子高校生が、やはり白血病で亡くなった。ああ、これは人ごとではない。私自身が同じ苦しみを負っているのだ。

1945 年のあの日、私は 15 歳の中学生だった。先にも言ったように、仲間の学生と共に、工場に動員されていた。私と一緒に働いていた学生の 90% は、死ぬか傷つくかした。私は腰を強く打っていたが、奇跡的に傷を受けなかった。私はやがて元気にスポーツをやり、マラソン大会などでは優勝し、柔道に熱中した。

そうして、あの日から 17 年たった年の 3 月、私は激しい腰の痛みを感じた。痛いところを押えてみると腰の筋肉に固いシコリがあつた。それから 1 年と 4 ヶ月、私は多くの医者の治療を受け、あちこちの病院に行ってみた。しかし医者はだれもはっきりと診断することができなかつた。シコリは次第に大きくなるようであつた。

ついに、1962 年、私は原爆病院を訪ねた。そこでいろいろと原爆に関係した診察やテストをされた。とうとう、手術をしてみなければ、病気の性質がわからないということになった。そのときまで、私のかかった多くの医者は、心配いらぬ、すぐに良くなるよと言っていた。しかし、悪くなる一方なので、私は怖くてたまらなかつた。6 月 25 日に原爆病院の入院通知が届いた。入院してみたら、驚いたことに、高校時代の同級生が先に患者としてそこにいた。友人は皮膚ガンだということであつた。私たちは、原爆の体験と、それによる苦しみを共にそこで分かちあつたものだった。

6 月 29 日、シコリの一部を切りとる手術を受けた。そうして、8 月 3 日、医者が私の病室に来て「検査の結果が出ました」と言った。私は不安な思いにかられた。医者はつづけて言った、「あなたの腰にできた悪性腫瘍は、ガンの一種です。手術して取り除かないと生命の危険があります。」

私は、そうすれば治って、また、もとのような生活に戻れるだろうかとたずねた。医者は、完全に、平常の健康をとり戻すことは難しいかも知れないと言った。私は 32 歳だった。結婚して、1 歳になる赤ん坊がいた。この医者のことばに、私は思い悩み、また、思いどつた。まったく自信がなくなり、どうしていいか分からず、不安だけが私のところを占めていた。私は気力を失い、うつうつとなつた。今でさえも、一応、回復したように見えるが私は言い知れぬ恐怖に襲われ、気が沈むのである。私は、家族のものの健康も心

配だ。そうして、生命のことや、長く生きたいと考えたりする。あとどれだけ、私は働きつづけることができるのだろうか。私はやっぱり死にたくはない。このように煩悶し、恐怖にとりつかれて生きるのは、原爆にあったものの逃れられない運命かも知れない。このように苦悶に似た思いを、その深みまで表現することはきわめて難しい。医者の方告を受けた日は、私にとって、そのような苦悶の旅のはじまった日であった。それは、言い表しようなもない、苦痛と不安である。医者の方告に、私の心はくじけ、孤独と絶望の中に私はくずれおちた。

それから3日後、8月6日は原爆記念日であった。大勢の人々が原爆病院を見舞いにやってきた。男、女、老人、若者、みんな善意の人々で、私たちを励まそうとしているのだ。そういうことが分かってはいても、私は、実際そのとき、自分のことしか考える余裕がなかった。

慰問客の中には、外国人も多かった。しかし、私には、彼らが訪れる理由は分からなかった。何人かずつグループになってやってくる。みな善意をむき出しにし、私はお礼を言わねばならなかった。しかし、私は彼らを憎んでいた。「お前たちの国が原爆を落としたんだぞ」、「俺たちのみじめな姿がわかってたまるか」、「原爆がどんなもの分かっているのか」、「ただ慰めるだけで済むと思っているのか」、「自分たちのアピールのために利用しようというのじゃないのか」。そんな思いに駆られるほど、私はまったくすてばちな気持ちになっていた。しかし、どうやら、私は沈黙を守り、外国からの見舞い客に対するひややかな心を押しかくしていた。

しかし、よかったことに、私にはアメリカ人の友人がいた。その数年前に東京で知りあったのであった。その家族は週に二回も、航空郵便で手紙をよこし、私の健康と生活のことを心配してくれた。この友人は、いまでも、ますます親しく私と良い交わりを保っている。これはただ一人の神を信じる信仰に根ざす、真の友情だと思う。深い感謝を神にささげたい。

手術の後、私は放射線治療を受けた。そうして退院をゆるされた。しかし、今も、私は疲れやすく、腰が息を吸ったり吐いたりするたびに痛む。この痛みと共に、あの日の記憶がよみがえる。

戦後は、原爆を受けた人々の中にも、そのことを隠そうとする傾向がある。体にヤケドのあとがあり、体に不調を覚えているのに、私も、黙っていたのだ。しかし、私はもう黙っておれない。

1966年の8月、原爆記念日の前に、私は偶然にYMCAの会に出た。日本全国から人々が集まっていた。そこで原爆の映画が上映され、それについて討論があった。

そのとき、私は、25年前のあの日に連れ戻された思いであった。20万人以上の人々が死に、生き残ったものも、なお苦しんでいる。私は、自分が沈黙していることの中に、私の罪をみた。ヒロシマの声が次第に消えようとしていると言うのを聞いたとき、そのことを、自分の心につきささるような感じた。平和を来たらせるために、私もまた、一生懸命に祈

り、活動しなければならないと思った。

私はつまらない、ただの一人の男にしかすぎない。でも、私も、平和のために、少しでも貢献し、努力しなければならない。平和への道が平坦でないことはよく分かっている。しかし、原爆のことを証しすることは、二度のあの悲惨さと苦痛を人類がひき起こしてはならないということを語ることなのだ。

私たちは、世界の良心ある人々に、この体験のことを正しく伝え続けなければならない。それが、私たちの神に対する責任であり、同胞に対する責任である。戦争の恐ろしさは知らせねばならない。広島こそ、その最大の証拠ではないか。

戦争は、罪である。もし、私たちがここをあわせて、協力して防がなければ、私たちは滅びてしまう。戦争を防ぐことは、神と同胞の前での義務である。

広島のをめきに耳を傾けよう。広島のもつ恐ろしい意味を考えよう。あの日の広島、そして今日の広島。私のところには、二重うつしになる。私はここから祈る。人類の将来に、ふたたび、このような恐ろしい日を、苦しみを来たらせてはならないと。